

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区  
夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

## 展示館参観と教育

三月、福竜丸が被爆、五月に原水爆禁止署名運動杉並協議会結成、それは八月には全国協議会にひろがった。これが一九五四年であった。私は当時、学生生活のかなりの部分を「うたごえ運動」への参加で過ごした。八月六日、「原爆許すまじ」が広島で初めて歌われ、その年から私も、この歌をいくつもの会合で歌った。この歌は、岩波書店版『近代日本総合年表』にも登場している。それは一九五四年九月二三日の社会欄であり、そこには、「第五福竜丸無縁長久保山愛吉死去。一〇・九静岡県漁民葬入原爆許すまじ」(木下航二作曲)のコーラスに送られる。と記されており、いまでも、この場面を想像すると、じーんとする。

私は杉並区の住民であり、杉並の運動の様子は承知していたが、そこには参加できず、大学でのサークルや、ある農村へ通って青年との交流に忙しかけていた。またこの年、教育二法や旭丘中学校事件という戦後教育にとって重大な法案と事件があった。前者は教師の政治活動を制限しようとする二つの法案であり、後者は、憲法・教育基本法の精神に即して関係者一同の協力ですすめられていた民主教育を市教育

## 山住正己

委員会が「偏向教育」ときめつけて是正を勧告し、三教員に対し転任を発令し、教職員組合が強い反対闘争を展開し、分裂授業にまでいたった事件であった。教育学を専攻し、民間教育研究運動に参加し始めていた私は、これらに無関心ではいらなかった。

このような事情から一九五四年は私の人生にとって節目の年となった。以後、第五福竜丸の扱いにもたえず注意を払い、廃棄物扱いに憤慨し、美濃郡都政下の展示館開館を心から喜んだ。そこで中学生や小学生の息子や娘も連れて見に行こうと思いつきながら、多事多端ついに二十年経ってしまった。これは私にとって恥しく反省すべきことのひとつである。子どもたちは、両親に連れられてでなければ夢の島まで行けないという年齢をはるかに過ぎてしまった。

今回は、これまた前々から関心をもっていたベン・シャーン作品が展示されると聞いて何としても展示館に足を運ばなければ、と心に決め、会期切れ直前の十一月三十日の夕方訪れた。「ラッキードラゴン」は展示館の秦小夜子さんがいうように「怒りよりも悲しみを感ぜさせるとも美しい絵」で

あると思った。それは「ゲルニカ」や「原爆の図」とはちがう力で見ると迫ってくる。

会場の一角に置かれた来館者の感想文集に「彼の訴えようとするものの芸術的表現のすごさ、新鮮さにたじろいでいます」とあったが、まったく同感であった。

しかしその感想文集のなかには衝撃を受けた文がいくつもあった。それは小学生たちの第五福竜丸にたいする「ちよきたなくてくせーえ」「ウルトラきたなかつたぜーい」「とてもグサイ」といった感想である。何人かがこの調子で書いていたので、これは明らかに教師に引率されてきた子どもたちの文である。教師は平和教育の一環として子どもたちを連れてきたのだらうが、子どもたちの感性・理解力にあった歴史教育が行なわれていなかったと見る他ない。

被爆体験の風化に対し、岩垂弘氏は本紙二二二号に、実物による教育、学習機会の継続的提供を訴えていたが、私も同意見である。このような教育・学習がすすめる可能性をもっているのは、どこよりも学校である。過去をしっかりと見つめることによって人々は生きる力、未来をきりひらく力を育てることが出来る。歴史の美化、歪曲はこのような力を萎えさせ、眼を曇らせてしまう。

(東京都立大学総長)

## 船と作品に熱いまなざし ベン・シャーン展終る

ファッションナブルな服装をした若い青年たちが続々と訪れ、作品に熱いまなざしを注ぐと共に、真剣に展示物を見る姿は、新鮮な驚きでした。

確かな手応えを残して、一カ月の会期を終え「第五福竜丸のベン・シャーン展」は、十二月一日終了しました。

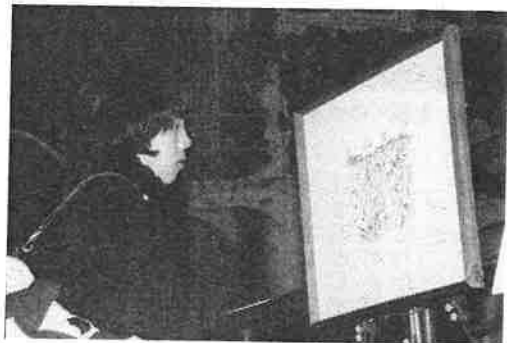
都内、近郊はじめ、福島、仙台、山形、焼津、名古屋、富山、長野、大阪、神戸、広島、岡山、徳島、北九州、佐賀市、遠く北海道、沖縄など全国から来館者は訪れ、多くのメッセージを残してくれました(一部、下記紹介)。

「ラッキー・ドラゴン・シリーズ



船に視線をむける  
『ラッキードラゴン』

ズの全容」のコーナーにも大きな反響があり、特に「久保山とラッキー・ドラゴンの伝説」の出版を求める声が多く寄せられました。十二月三日、『ラッキードラゴン』は、船体の側から外され、丁寧に梱包された後、迎えにみえた福島県立美術館の学芸員の方と共に、帰ってまいりました。大きな存在がぼっかり抜けたような淋しさでした。第五福竜丸と「ラッキー・ドラゴン」の「邂逅」。それは、夢のような一カ月でした。



素描「出航」を見つめる

【感想ノートから】  
ベン・シャーンをみに来ました。第五福竜丸のことは何も知りませんでした。事件のこと、ベン・シャーンの内面を知ることができて大変良かった。自分の事や、世の中の事をもっと考えます。

\* 悲しいとかという感情とは別にナミダが出ました。絵を描くことを目ざすものとして訪れました。大きな美術館にかざられるよりもここにこうしてある方がベン・シャーン作品は生きていくと思えました。私に何が出来るかわかりませんが、でも今日ここで感じたことは忘れずにいたいと思います。

\* ベン・シャーンは好きで、度々展覧会で見ていました。しかし福竜丸の下で、シリーズを見て胸が熱くなりました。その志の高さと、核の持つ犯罪性を強く感じます。

\* ベン・シャーン作品と第五福竜丸がピッタリ息の合った展示となっていて深く感動した。教養子の中学生たちに「平和」をさらに伝えたい。

\* 放送大学でこの博物館のことを

学んでいつか来たいと思っていたが、なかなか時間がとれなかった。今回ベン・シャーン展のことがあり、来る事が出来、今はいろいろな思いで胸がいっぱいです。

\* 過日「日曜美術館」で知り、初めてお邪魔いたしました。今回の「第五福竜丸」と「ベン・シャーン」との「悲願の競演」は実にすばらしい企画。今後ともかけがえない被爆の生き証人である「第五福竜丸」の存在をいんな方法を用いて、日本はもとより、世界中に発信しつづけてほしいと願う。

\* 「ラッキー・ドラゴン・シリーズ」はここにあってふさわしいものだと、すごく思いました。ずっとここに展示してほしいけれども、そういうわけにもいかないと思うので、今度はぜひ全作品を展示して下さい。

\* ベン・シャーンは一番好きな画家であり、世の中には忘れてはならない事がたくさんあると思いつけています。今回、第五福竜丸を前にしてその思いはますます強くなりました。子供がもう少し大きくなったら連れて来ようと思っています。

### 「核兵器のない世界」が現実的目標に — パグウォッシュ会議の成果と課題 (3) —

小川 岩 雄

全面完全軍縮を目指すパグウォッシュ会議の「日本版」として、湯川博士らが一九六二年五月、京都の天竜寺別院で開いた第一回科学者京都会議には、朝永振一郎、三宅泰雄(当協会前会長)、両博士ら指導的な自然科学者の他、宮沢俊義(憲法学)、都留重人(経済学)、谷川徹三(哲学)、大仏次郎(作家)の各氏ら各界の権威も多数招かれ、三日間にわたりさまざまな角度から目標達成の途が探られた。

最終日に発表された約三千五百字に及ぶ長文の声明は、湯川博士が自ら起草した格調の高い前文に始まり、ラッセル・アインシュタイン宣言の精神に基いて全面完全軍縮と平和の時代の実現を力強く呼び掛けている。なおこの会議の事務は、豊田利幸博士ら中堅物理学者がすべてを担当した。宿舎は近くの小さな旅館で、資料の旧式コピーや風呂の湯加減の点検、ピー

ルの注文などに走り回ったことが懐かしく思い出される。

この声明は新聞などで大きく報道され、広く国民的支持を得ることができた。これに勇気付けられた湯川博士らは、その後勉強会や会議を重ね、一九七五年九月にはパグウォッシュ評議会の要望に応えて、国際的なシンポジウムを日本で初めて開催した。

「完全核軍縮への新しい構想」—— 科学者・技術者の社会的機能」をテーマに京都で開催されたこの会議には、各国から三十二人が参加し、核兵器を「絶対悪」と認めるとともに、国際的レベルで初めて核抑止論の詳しい分析と批判を試みた。病後の身を押しつけて車椅子で出席した湯川博士ら日本のグループはもちろん、早くからの熱心なパグウォッシュ族の一人だった米国の物理学者B・フェルド博士を始め、海外からの参加者も挙って核抑止政策の不条理と危険性を鋭

く指摘し、その克服を訴えた。とは言ってもこれらの参加者はまだ少数派であり、全体の流れを変える力はなかった。しかしその後間もなく歴史の流れが人々の予想を越え驚くべき展開を見せた。とくに八十年代になって米ソがヨーロッパで巡航ミサイルなどの中距離核戦力(INF)を強化しはじめたことから草の根の反核運動が急速に盛り上がり、ついにINFの全廃という画期的な成果が実った。この運動はやがて全世界に拡がり、レーガン、ゴルバチョフ両大統領の決断で九一年、米ソ間の第一次戦略兵器削減条約(SALT I)、九三年には第二次戦略兵器削減条約(SALT II)が締結され、両国の戦略核弾頭数は二〇〇三年までにそれぞれ約三千五百発(締結時の約1/3)に減ることになった。

核軍縮のこのような進展は旧ソ連の崩壊による東西冷戦の終結でいよいよ弾みが付き、例えば九五年四～五月にニューヨークで開かれた核不拡散条約(NPT)の再検討・延長会議では、条約の無期限延長の決定と同時に懸案のCTBT(包括的核実験禁止条約)の九

六年内締結などが申し合わされ、去る九月ついにそれが実現した。こうした状況を背景に、パグウォッシュ会議での議論にも九〇年ごろから漸く変化が現れ始め、マクナマラ元米国防長官のようなメンバーも加わった作業グループで「核兵器のない世界」の必要性や実現可能性について真剣な検討が行われた。そして昨九五年七月、広島で開かれた第四十五回年次会議は、初めて「核兵器のない世界をめざして」を主題に掲げ、活発な討論を行った。湯川博士らが早くから主張してきた核抑止論の克服が、三十五年後ついに会議の総意となり、「核兵器のない世界」が国際社会の現実的目標となったことは誠に感慨深い。

この年の十一月、パグウォッシュ会議とロートブラット会長にノーベル平和賞が授与された。国際的に高く評価され、期待を寄せられた科学者たちは、今後さらに広範な市民との連携を深め、次世代の科学者に志を伝え、固有の社会的責任を果たしたい、との決意を新たにしている。

(立教大学名誉教授、協会理事) 前々号(連載22) 最下段末尾から8行目、軍備を軍縮に訂正します。

### 第五福龍丸を造った船大工 南藤藤夫さんを悼む

桃 木 夏 彦



古座川の古座造船所の跡地で。故 南藤藤夫氏

第五福龍丸の船大工であり、設計者でもあった南藤藤夫さんが、十一月三日、心不全のため、和歌山県那智勝浦町の病院で亡くなられた。七十八歳だった。南藤さんと出会ったのは、一九八二年。それ以来、十四年間もの長い間、第五福龍丸の誕生秘話を聞かせてもらった。

寡黙な人で、一度の取材で話をしてももらえる量は、ごく僅かだった。だから、十四年ものお付き合いができたのかも知れない。淡々とした喋りの中に、誇りが語られた。悲しみが語られた。怒りが語られた。そして、平和が語られた。和歌山県古座町にあった古座造船所の跡地で、一九四七年三月の進水式の様子を話してくれた南藤さんの表情には、わが娘を嫁にだす父親の満足感があつた。残されている設計図を出して、資料調達のことや、美しい船姿を誇らしげに喋った。

一九五四年三月一日、ピキニで死の灰を浴びた話になった時は、終始うつむき加減で、涙声になった。やさしい喋り口調が、かすれて聞こえ難くなった。夢いっばいに建造した船が、地獄のどん底に突き落とされた怒りは、想像を絶するものがあったと察しられた。だが、表情は穏やかだった。

取材中に、「東京、夢の島に保存されている第五福龍丸と再会したい」と言い出し、実現した。「平和を問うかける船として、私の造った船が残されているのが嬉しい」と、展示館で感慨深げだった。だが、一四〇吨の船体が残されているながら、エンジンが欠落していること

を気にしていた。それには、特別の理由があった。

廃船処分となった一九六七年、エンジンだけが第三代川丸という船に使われた。そして、翌六八年七月、同船が熊野灘で座礁沈没し、エンジンが海中に没したのである。不思議なことに、その場所が、南藤さんが精魂を込めて建造した第五福龍丸の誕生地の地のすぐそばであった。「私のところへ帰ってきてくれたんや。放って置いたらかわいそうやなあ」と話してくれたことがあつた。それが、気掛かりだったのだ。南藤さんの取材をとおして制作した、『NHKスペシャル』『流転・秘話・第五福龍丸』(一九八九年放映)では、鎮魂のための酒を持って、エンジンが沈んでいる現地を訪れた。南藤さんの背中が、痛いほどに寂しく感じられた。この十一月三日に亡くなられて、一カ月後の十二月二日、熊野灘に沈んでいたエンジンが、二十八年ぶりに引き揚げられた。

もう一カ月早くに揚げられていたら、南藤さんは、どんなにか喜ばれたことであろうか、と思う。熊野人の根性と勇気とやさしさを、南藤さんは、第五福龍丸をとおして語ってくれた。そして、「平和を問う船」という歴史に残る船を置いていってくださった。ご冥福をお祈りします。(放送作家)